発信のあり方見直す時

寄稿　3・11に寄せて

浪江町出身の歌人、三原由起子さん(35)は震災後、原発事故で依然立ち入り規制が続く故郷の地で詠んだ歌を発表するなど、多方面から本県の現状や県民の思いを発信し続けてきた。3・11に合わせ、三原さんがあらためて「発信のあり方」についての思いをつづった。

歌人　三原 由起子さん(浪江出身)

「食品工場」？伝わらぬ思い

人の住めない街に工事車両が頻繁に往来している。平日の昼間の国道6号は、震災前よりも交通量が多いのではないかと思ってしまう。

2月、両親と震災後初めて、実家のある浪江町に帰省した。私個人としては1年ぶりの帰省である。双葉町から浪江町に入ってすぐの中継地で、防護服を受け取る。実家のある商店街周辺の放射線量は比較的低いが、傷みを増す実家の汚れが服に付かないようにするためでもある。

中継地をあとにするときに、東京電力のマークを胸につけている人たちが深々と頭を下げ、私たちを見送る。私は胸が苦しくなる。そこにいる人たちの責任ではないのに。現場とは常にそういうものなのだろうか。

途中、浪江町役場に立ち寄ると「常磐自動車道全線開通」の垂れ幕があった。開通のために高い線量のなか、工事に携わった人たちがいることを思った。

父が家の片付けをしている間、母と近所を散歩した。小さいころよく遊んだ中央公園は重機が置かれ、砂利が山積みの資材置き場になっている。浪江の現状を東京に住む友人に知ってほしいと、風景や防護服姿の写真をメールした。すると、すぐに一人の友人から返信があった。「帰省楽しんで。電車で行ったの？食品工場でお手伝いしているのかな？」と。私は目を疑った。怒りと同時に無力感に苛(さいな)まれた。発信をしているつもりでも、受け手に意識がなければ伝わらないのだということを思い知らされたからである。

母校の浪江小校門前に立つ三原さん(右)ら。防護服姿が東京の友人に食品工場で働いていると誤解された

浪江町内のレジャー施設「マリンパークなみえ」で建設が進む仮設焼却施設

福島に縁のない人の大多数はその程度なのかもしれない。常磐道全線開通のニュースや、都内でもよく見かける安心安全キャンペーンで、福島は元通りになったと、東京の人はむしろ無関心になっているのではないだろうか。

のちに冷静にその友人との付き合いを振り返ったとき、無意識に気を使っていて、意外と自分のことを話していなかったのかもしれないと反省した。双葉郡出身の友人たちが、「東京で原発事故の被害者だという話はできない」と、言っていたのを思い出す。

日本の人口に対し、双葉郡の人や出身者は少数派にすぎない。だからといって、賠償や地元に雇用を与えることで、なかったことにされてしまってよいのだろうか。私たちは発信のあり方を考えていかなければならない時期に来ている。

みはら・ゆきこ　1979年、浪江町生まれ。いわき光洋高、共立女子大卒。「日月」所属、現代歌人協会会員。2013年に16歳から33歳まで17年間の作品をまとめた第一歌集「ふるさとは赤」を発刊した。